

# 名たんてい そばかすジギー

ハインリッヒ・クラウス 作 / 臼木文世 訳

はらぺこ女<sup>じょ</sup>装<sup>そう</sup>作<sup>さく</sup>戦<sup>せん</sup>



# 名探偵 そばかすジギー ②

はらペコ女装作戦

じょそうさくせん

初版印刷 1986年2月25日

初版発行 1986年3月5日

作者 ハイブリッヒ・クラウス

訳者 白木文世

絵 ワルター&トラウドル・ライナー

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社 厚德社

発行所 株式会社 国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

電話 (03)943-3721(代)

振替 東京6-90631

装丁 白川三雄

検印廃止

訳者紹介●白木文世(うすき ふみよ)

1948年、茨城県生まれ。1971年、慶応義塾大学文学部独文学科卒業。1973年より3年間、西ドイツのダルムシュタット市にくらす。帰国後、ドイツ語圏の児童文学の翻訳にたずさわる。

NDC 943

クラウス、ハイブリッヒ

はらペコ女装作戦 白木文世訳

国土社 1986

151P 22cm(名探偵いそばかすジギー2)

ISBN4-337-14002-6 C8394

# 名たんてい そばかすジギー

— 絵 そう さく せん  
はらペコ女装作戦

うすきふみよ  
白木文世 訳



▶ジギー・ブレ

そばかすで赤毛の少年。  
数かずの難事件を解決したこともあるのだが……。



◀エディーおじさん

ジギーのおじさん。  
私立探偵をしている。

▶ジギーのパパとママ

ジギーにるす番をたの  
んで出かけるが……。



◀ベルタおばさん

ジギーの名づけ親で、笑  
のエディーおじさんにま  
けない、ほうけんずき。



もくじ

1	インディアンのおのとワシの羽 <small>はね</small>	5
2	自宅 <small>じたく</small> きんしん、いつまでつづく!?	24
3	おつかい	38
4	ムム、あの声は……	53
5	チャーリーとひげじいさん	64
6	ホテルはすてき!	83
7	ジギーは女の子!?	101
8	チャンスはいまだ	115
9	失敗 <small>しっばい</small> は成功 <small>せいこう</small> のもと	127
10	夕 <small>ゆゆう</small> ぐれのなかなおり	146
	訳者 <small>やくしゃ</small> あとがき	151



◀チャーリー・フリック

あるときは老人ろうじんに、あるときは若者わかものにと、へんそうがとくいなのぞの男。

▶ヘディーちゃん

ベルタおばさんのおさななじみ。



Sigi Wulle  
und der Einbrecher

Text copyright © 1976 by Heinrich Kraus

Illustrations copyright © 1976

by Traudl and Walter Reiner

Year of first published of original edition

Japanese translation rights arranged with

Erika Klopp Verlag GmbH, Berlin

through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

## 「インディアンのおのとワシの羽はね」

モルモットのシュトルプスが、居間いまのソファの上で、ニンジンをかじっている。パパとママが見たら、さぞかしおこるだろうな。

きょうは、お昼から一人です番なんだ。だから、いつもは小屋こやにいるシュトルプスをつれてきたってわけ。そのほうが、さみしくなくていい。

宿題しゅくだいをやる気になれなくて、ぶーぶー、もんくをいつていたら、シュトルプスがびっくりしたように、ぼくを見つめる。

やつはいいさ。動物どうぶつだから、比例計算ひれいけいさんをといたり、あほらしい作文を書いたりしなくてすむ。

「自分のこと」だって！ へん！ いったい、だれが自分自身じしんについて、ノートに三ページも書けるっていうんだらう？

他人のことならよくわかる。弱虫でバカだとかね。だけど、自分のこととなると、さっぱりわからない。

たっぷり二時間かかって、書きあげたものを読みかえす。

「人間はほにゆう類である。サルとおなじ祖先をもつことは、こんにちでも、サルにたやつがおおぜいいることから、あきらかである。

なん千年ものあいだに、人間はすこしずつ進化してきた。からだをおおっていた毛がなくなって、わずかな部分にだけ、毛がのこったのである」

ここまでが作文のでだしで、本論はつぎのとおり。

「ぼくは、人間である。十一さいの少年だからまだ育ちざかり。なにしろ人間は、十八さいまでは成長してゆくものらしい。

名前はジギー・ブレ。ぼくがうまれたとき、両親にはジギーという名が気に入っていたのだろう。

ブレという名字は、父や祖父、おじや曾祖父とおなじである。



ぼくは男性だんせいである。そばかすだらけの顔に、まっ赤なかみの毛なので、男の子にはよくからかわれる。

女の子は、反対はんたいにかっこいいと思っ  
ている。ぼくといっしょだと、自分が目立  
つからだろうと思う。

そのほかの特徴とくちょうとしては、でっ歯はがあ  
る。このせいで、ウサ公こうとよぶやつがい  
るが、それだけはがまんならないので、  
けんかをすることになる。

たいてい、相手あいてのほうがおおきいけど、  
勝かつのはぼくである。けんかのこつを  
知っているからだ。おしえてくれたのは、

たんていをしているおじさんだ」

もつとつづけて書かなくてはいけないのだけれど、ぼくはノートをほうりだした。気ばらしに、家のなかのたんけんだ。

ママだったら、あまいものしまい場所ばしょを、しょっちゅう、かえるんだ。ぼくにねられると思っ  
てね。だから、ママたちがでかけた日は、たんけんにもってこいな  
のさ。

食料庫しょくりょうこをごそごやっていると、げんかんのチャイムがなった。あわてて食料庫このとびらをしめ、そつとげんかんにしのびよった。

くもりガラスごしに外をうかがうと、男の人のかげ。うわさ話のすきなおばさん  
じゃなくてよかった。

ドアをあけると、しらがのおじいさんが、あいそわらいをうかべてたっていた。

ハーハーあえぎながら、ふるえる手でかばんをあけようとしているので、

「あけなくていいです」

と、ぼくはいった。

「どうしてだい？」

「両親とも、でかけているんです」

「買わなくてもいいんだ、ええっ！」

「買わないで、どうするの？」

「いいものを見せるよ！」

こういって、おじいさんはインディアンのおのをとりだした。じつにみごとな武器だった。

ぴかぴかひかる刃。色とりどりの羽のついたえには、銀のびょうがうちこんである。ぼくはわくわくしてきた。

「どうかね？ ごほっごほっ」

「すごいや！」

「ほんもののインディアンのおのだよ。シウークス族のかじやがつくったんだ」

おじいさんはささやいた。

「かばんのなかには、もっといいものがはいつてる。ほんもののワシの羽はねでつくつたしゅうちよう酋長はねの羽はねかざりなんかかな……。ごほん」

「見たいなあ」

ぼくはためいきまじりにつぶやいた。

「ぼく、このあたりのコマンチの酋長しゅうちようなんだ」

「買わなくたっていいんだから」

とって、おじいさんは、家のなかへはいりこんできた。

「カタログをおいていくよ。あとで、おやじさんに見せてやりな。誕生たんじょうび日のプレゼントに注文ちゅうもんすればいいさ、ごほん、ごほん……」

げんかんのドアがボタンとしまった。

まずいな。しらない人をいれてはいけないって、パパとママがいったぞ。とはいうものの、かばんのなかを見ないことには、ぼくの気持ちきもちはおさまらないし、い

いさ、こんなよぼよぼのじいさんだ、おかしなまねをしたとしても、なんとかなるだろう。

居間いまのドアがしまつたとたん、じいさんはピストルをとりだし、こういった。「手をあげろ！」

ぎよつとした。そぶりにはださなかつたけどね。で、ひるまず、やつなのど首にとびかかったんだけど、相手あいてはすばしこかった。ガーンと音がして、気をうしなつてたおれたのは、ぼくだった。

目をさますと、しっかとしばられていて、悪党あくどうが、ずるそうならいをうかべながら、見おろしていた。手のふるえはぴたつととまっているし、苦しくるげな息いきづかひもしていない。

「コマンチの酋長しゆうちやうどの、ゆるしたまえ！ やむをえず、ピストルのにぎりて頭をたたいた」

「ハレンチなコヨーテめ！」



と、ぼくがいかえすと、やつは足でけとばした。

「どうするつもりだ？」

「おれさまのお目あては、もちろん金だ！」

「お金なんか、ないよ！」

「だが、おまえの金だといった？」

やつはせせらわらった。

「おまえのおやじの金だ。どこにあるか、おしえろ！」

「知らないっ！」

「いうんだ！ 時間がねえ、ええっ！」

ぼくは、だまっていた。

「めんどうなことになるぜ、千比しゅうちよう長さん！」

「いももんか」

「いっちまえ、おい！ いえ！」

それでも、だまっていると、横よこっぱらをなん度もどけられた。ぼくは歯はをくいしばって、こらえた。ほんとのインディアンなら、こんなときこそ、勇ゆう気をしめす。うかつにも、こんな悪あく党とうを家のなかへ入れてしまい、パパとママのあせの結けつ晶しょうのだいじなお金をとられるなんて、じょうだんじゃないよ。

ぼくのていこうにしたをまいた敵てきは、なにかいい方法ほうほうはないかと考えこみ、あたりを見まわした。やがて、ソファのひじかけのかけにかくれていたシュトルプスを見つけると、にたーっとわらった。シュトルプスをつまみあげ、ぶらぶらふりながら、こういった。

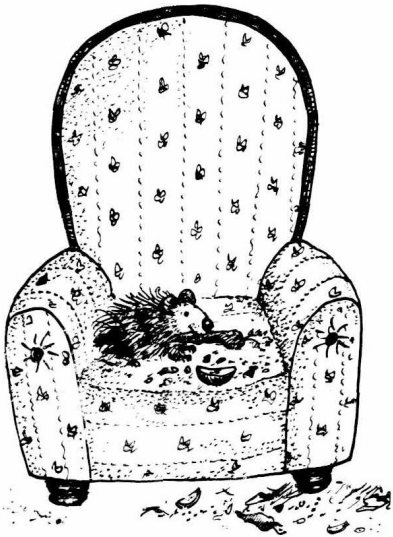
「だれんだ？」

「ぼく……」

「なんて名前だ？」

「シュトルプス」

「シュトルプスは、おまえの友だちか？」



「うん！」

「じゃあ、かべになげつけるのは、どうかな、ええっ！」

と、いつて、やつが手をふりあげたので、ぼくは思わずやめろとさげんだ。

「だったら、いうんだ！」

シュトルプスの命をすくうためには、あきらめるほかなかった。

「お金は……」

「どこだ？ さっきといっちまえ！」

「……ママたちの寢室しんしつのタンスのなか……」

「はやくいやあいいんだ」

やつは、二階かひへあがっていった。お金を見つけたしてから、ほかにめぼしいものはないかと、あちこちかきまわしていた。

へん、おあいにくさまだ！　うちは金持かねもちちじゃない。毎日のくらしにいるものしか、おいてないよ！